



Adolf Windaus 賞受賞講演時の筆者

また同時に、外来語のカタカナ表現を廃止すべきである。近年、外来語のカタカナ表現は目にあまるものがある。商品名しかり、会社名しかりである。このことが、どれだけ日本人の外国語習得を阻害しているか計り知れない。また日本人が外国人と結婚した場合、わざわざその人の名前を似たようなカタカナに置き換えて入籍するというやり方も改めるべきである。例えば Vivianne という外国の女性が、日本人の男性と結婚した場合、Vivianne をビビアンとして入籍させている。ビ (bi) は vi とは全く異なる発音で、これが聞き分けられないと英語は話せないのである。一方で英語教育を義務づけていて、他方でそれを阻害するようなことを許しているというのは、自家撞着もはなはだしい。

漢字に比べalphabetの導入などなんでもない

小学校や中学校で教えられる漢字の数は、昔にくらべれば著しく制限されている。だから、26文字の alphabet を教えるぐらいのことは、なんでもないのであろう。これまで日本人は、英語の習得に随分時間と労力をかけている。それにもかかわらず、日本人の英語下手は世界の常識になっている。外交や貿易においても、日本人は随分大きな handicap を負っているのではないか。論文を国際学会や雑誌に発表するにあたって、大変不利な条件を強いられている。もし alphabet を日本語に取り入れれば、英語学習に費やす時間と労力はどれだけ節約できるかしのれない。(英語だけでなく German, French, Spanish 等 alp-

habet を使っている語学の学習についても同じことが言えるはずである。実際 alphabet を使っている国の人々は数ヶ国語を話す人が多い。) その分、多くの時間と労力を他の勉強に廻すことができる理で、日本人全体にとってどれほど得になるか計り知れない。しかも、英語力は今までよりはるかに向上するはずである。

ただ、こんな簡単なことが明治以来どうして日本の教育に取り入れられなかったのであろうか。

(国語教育の方針を決める審議会に英語やその他の外国語の専門家も入っておられるのだろうか?) 日本語をやめて英語に変えろとか、French に変えろとかいう意見を吐いた人はいたようであるが、alphabet を取り入れよといった意見を述べた人を知らない。かって、あの膨大な漢字を日本語に取り入れた日本人だから、僅か26文字の alphabet を取り入れられないはずはないと思うのだが、言語学上何か不都合なことでもあるのだろうか。是非専門家の意見を聞いてみたいと思っている。

欧米人 complexの解消にも

alphabet を国語に取り入れることの利点は今ひとつある。それは、これによって日本人の欧米人に対する complex が解消されるのではないか、ということである。開国以来、日本は必死に欧米の水準に追いつくことを念願として来た。それは、自然に日本人の中に欧米崇拜思想を植え付けて来た。この思想は、日本人自身の inferiority complex と表裏一体である。少なくとも、science の分野で日本よりはるかに進んでいた欧米人の発音が聞き取れないことが、これを刺激したのであろう。これが個人間の関係でも国家間の関係でもギクシャクした関係を生み出して来た。ある人は考えられないほど卑屈になり、ある人は逆に馬鹿みたいにシャチホコばり、相手の普通につきあおうという気持を挫いて来た。教育の高い人々にこの complex をもった人が意外と多いことが、日本の対外政策や教育・研究にすら影響を及ぼしているように思える。もし alphabet が日本語に取り入れられていれば、このような complex ははるかに軽減されるのではなからうか。

complex は、日本人が国際社会に入っていく際不必要というより有害なものである。それから抜け出さない限り、日本人は対等の立場で欧米人とつきあえないのではなからうか。

日本語に

の導入を

ALPHABET

広島大学名誉教授
(スウェーデン国カロリンスカ研究所客員教授)

奥田 九一郎

広島大学を停年退職後こちらに来て丁度2年になる。若かったころの留学とは違って今回は日本で長い教員生活を経験して来ているので今回の海外生活では日本と欧米の教育制度の違いや生活の違いが大変よく分かった。その中でも最も印象的なのは言葉である。

進歩しない英語の発音

America 合衆国に1年半, Sweden に3年, Germany に半年と合わせると外国に5年間住んでおり, それ以外にも十数回国際学会に出ているが, 英語の発音は一向に進歩しない。英語そのものは, 12歳で中学校に入った時習いはじめて以来ずっと使っているが, 書く方はともかく聞くほうはさっぱりである。いまだに単独で発音されるとrとlの区別がつかないどころかbとvやfとhの聞き分けすらできない。これは, 日本語の中にこういう発音がないのだから仕方ない。

国際学会で引けを取る日本人

国際学会で激しい討論がなされると, たいいていの日本の研究者はついていけない。(まだ駆け出しのころは国際学会に出られるような偉い先生方は欧米の学者と何らの引けも取らず対等に堂々と議論しておられるのかと思っていたが, 国際学会に出てみるとそうでもないことがよく分かった。) 考えてみれば無理もない話で, 日本語にはない発音が英語(国際会議でよく使われる公用語)にはあるのだから, 日頃それを使わずして国際会議の時だけ使えということ自体どだい無理な話である。早くからこれらの発音を聞くことに慣れるだけでなく, 自分もまた正しく発音することに慣れていなければならない。そのためには, 学校で習うというより言葉を覚え始める時から, これらの言葉も他の日本語同様に覚えなければならない。

効率の良い外国語のmasterには

英語を効率的にmasterするためには, alphabetを日本語に取り入れることが一番よいと思われる。英語としてalphabetが中学で初めて教えられるのではなく, 小学校でアイウエオを習う際に alphabet 26文字も同時に習うようにすべきである。英文法を教える訳ではないから, これは英語ではないしローマ字でもない。ローマ字などを小学生に教えるのは, むしろ英語習得を阻害するのではないか。そうすれば, それは日本語であるから, 幼児が母から言葉を習うときに他の日本語と一緒に, 何らの抵抗もなく覚えるであろう。勿論, そうなれば欧米の固有名詞はカタカナに置き換えず, そのまま用いるべきである。Londonをロンドン, Romeをローマと言っていては, 日本人の英語力は絶対向上しないであろう。



FALK Symposium における Adolf Windaus 賞受賞講演での聴衆